

非常時におけるメディア活用に備えた 授業実践のための指導事例集の作成

1 はじめに

先の東日本大震災において、被災地以外の人々の多くは、その被害の深刻さをメディア経由で知ることとなった。また、ツイッターや USTREAM などの新しいメディアの活用が、人々を支援することにも結び付いた。一方、これらのメディア経由でさまざまな情報が交錯し、混乱を増幅させることにもなった。

新しい小学校学習指導要領の総則では情報モラル教育の必要性が示されている。総合的な学習の時間の項目では「情報が日常生活や社会に与える影響を考えさせる学習活動」が示され、同解説の総合的な学習の時間編には「情報手段の進化によって日常生活や消費行動がどう変化したか」「情報手段の進化によって社会がどのように豊かになったのか」「日常生活にどのような新しい危険や困難がもたらされたのか」等の指導の観点が例示された。今後も変化を続けていく情報手段を効果的に活用させ、その際に必要な判断力や心構えを身に付けさせる指導の必要性が記されたものとする。これまでも、高橋ら(2011)が「情報が日常生活や社会に与える影響を考えさせる学習活動」のための授業パッケージや同パッケージを活用した教員研修プログラムの開発を行う等、この種の指導の普及・啓発への努力が重ねられてきている。しかし、情報モラル教育において携帯電話の持ち込み禁止指導が行われる等、メディア活用から児童を遠ざけるような対処療法的な指導が行われる例も、現状では散見される。加えて、「非常時におけるメディア活用」という視点からの指導がこれまで体系的に実践された例もほとんど見られない。

以上のことから、東日本大震災等に際して得た教訓をもとに、非常時におけるメディア・情報の動きやその可能性、とるべき行動や態度について考えるための「非常時におけるメディア活用に備えた授業実践のための指導事例集」を開発し、情報活用能力を育成する実践の普及・啓発の推進に、さらに寄与していくことが必要であると考えた。本研究では、東日本大震災におけるメディアの動きを題材とし、非常時におけるメディア活用に備えることを目指した内容を整理した後に、授業実践を構想・実施し、指導事例集としてまとめる。

2 目的

非常時におけるメディア・情報の動きやその可能性、とるべき行動や態度について考えるための「非常時におけるメディア活用に備えた授業実践のための指導事例集」（以下、「指導事例集」と記す）を開発するために、東日本大震災におけるメディアの動きを題材とし、非常時におけるメディア活用に

備えることを目指した内容を整理した後に、授業実践を構想・実施し、指導事例集としてまとめる。

3 研究の方法

指導事例集の開発に向けて、本研究は次のような方法で進める。

(1) 教える内容の整理

- ・メディアとのつきあい方学習実践研究会コアメンバー（以下、「コアメンバー」と記す）が、東日本大震災をきっかけに感じた非常時におけるメディア活用の課題や、非常時に向けて日頃から子どもに教えておきたいことについて意見を出し合う。
- ・上記で出し合った意見を元に、視点を設けて「教える内容」を整理する。

(2) 授業実践の構想

- ・「教える内容」の位置付けを意識して、コアメンバーが各自の教えておきたいことに基づいて授業案を作成する。

- ・授業案を持ち寄って検討し、メディアの種類や設定した分類を意識して授業実践を構想する。

なお、図1に示すとおり、(2) 授業実践の構想は2回に分けて実施する。1回目(図1の⑤)は2012年2月11日に開催した「第5回メディアとのつきあい方学習実践研究会学習会」で模擬授業を実施することを目途に行う。2回目(図1の⑨)は2012年10月6日に開催予定の「第6回同学習会」に向けて、1回目の授業実践以外の内容で構想する。

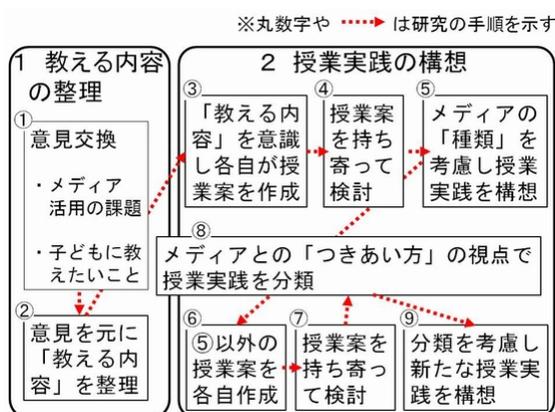


図1 授業実践を構想するまでの手順

4 教える内容の整理

(1) 意見交換

コアメンバーは2011年4月17日に開催した会議において、東日本大震災をきっかけに感じたメディア活用の課題や、子どもに教えることについて意見を出し合った。

出し合った意見は、表1の「内容」とおりでであった。多くの意見が、情報の受け手の視点から述べられたことが特徴的であった。

(2) 教える内容の整理

4(1)で出し合った意見をコアメンバーの代表4名で整理した(表1)。

教える内容は、「メディアによる情報量の違いを理解し活用すること」、「メディアの役割や特徴を理解し活用すること」、「メディアによる影響の違いを理解すること」という3つの到達目標、及び「情報の信憑性を見分ける力」、「情報を整理し判断する力」、「情報に影響されていることを自覚し判断する力」、「発信者の意図を見分ける力」、「必要な情報を得る手段を知り活用する力」という4つの育てたい力の、計7項目に整理された。

表 1 意見交換により出されたメディア活用の課題や子どもたちに教えたこと

項目	内容
メディアによる情報量の違いを理解し活用すること	テレビ・ツイッター・ラジオ・新聞などそれぞれのメディアで震災の情報が伝えられたが、それぞれのメディアには限界がある。例えば、ラジオは音声のみなので、状況を視聴者が想像で判断するようになり、不安をおおることもある。震災時に、より正確な情報を得て冷静に判断することは、混乱をさけるためにも大切であった。メディアによる情報量の違いを理解した上で情報を活用することが必要である。
メディアの役割や特徴を理解し活用すること	テレビは映像で受け手に状況を伝えることができ、非常時でも視聴者に娯楽をもたすことができる。他のメディアが活用できない中、震災時にはツイッターが活躍した。それぞれのメディアの果たす役割や特徴を理解していれば、非常時にも上手に活用することができる。
メディアによる影響の違いを理解すること	テレビの映像は、状況を分かりやすく伝える役目を果たした反面、人々に大きなショックも与えた。映像を見た子どもが気分が悪くなる等の問題も見られた。また、チェーンメール等でデマが広まったように、情報源が乏しい中では文字情報に影響を受けて行動してしまうことがある。それぞれのメディアが、非常時にどのような影響を与えるのか理解し、冷静に受け止める必要がある。
情報の信憑性を見分ける力	チェーンメールやツイッターの情報は、発信源は誰かを確かめ、冷静に受け止めて行動することが必要である。
情報を整理し判断する力	様々な情報が様々なメディアから次々と発信された場合、それらを整理し、どの情報が必要か、どれが正確な情報か等を判断する力が必要である。
情報に影響されていることを自覚し判断する力	様々な情報が様々なメディアを通して送られると、動揺したり冷静な判断ができなかったりする等の影響があることを自覚しておく必要がある。
発信者の意図を見分ける力	淡々と事実を伝えるだけでなく、情報が様々な内容を伝えるようになると、誰に何を伝えたいのか等の意図が見えるようになる。そして、情報を整理したり取舍選択したりでき、自分に必要な情報を得ることもできる。そうすることによって、混乱も生じにくくなる。
必要な情報を得る手段を知り活用する力	送られてくる情報は自分に必要な情報ばかりではない。自分が置かれた状況の中で、情報を得ることができるメディアにはどんなものがあるのかを知り、活用できれば、冷静に判断し行動できる。

表 2 1 回目の検討に持ち寄られた授業案

題材となるメディア・情報	本数
1) 新聞	3
2) テレビ報道	3
3) CM	2
4) 個人情報	2
5) ツイッター	2
6) チェーンメール	1
7) ラジオ	1
8) ネット情報	1

5 授業実践の構想

(1) 1 回目の授業案作成・検討

コアメンバーは 2011 年 8 月 6 日～7 日に開催した会議において、授業案を持ち寄り検討した。

持ち寄られた 15 本の授業案を、題材となるメディア・情報別に整理すると表 2 のとおりであった。検討では、授業案を質的に高めると共に、それぞれの教える内容について議論を深めた。

その結果、題材となるメディア・情報の「種類」をできるだけ考慮し、15 本の授業案の趣旨を踏まえた実践を新たに構想することとした。

(2) 構想した授業実践 (1 回目)

表 3 のとおり、6 本の授業実践を構想した。

それぞれの題材となるメディア・情報は、「1 新聞」、「2 ラジオ」、「3 音声情報」、「4 テレビ報道」、「5 チェーンメール」、「6 個人情報」とした。

なお、これらの授業実践は 2012 年 2 月 11 日、第 5 回メディアとのつきあい方学習実践研究会学習会で「模擬授業」として実施した。参加者へのアンケート調査で「模擬授業」に対する満足度を「5 点 (大変満足) ～1 点 (大変不満)」の選択肢により尋ねたところ、回答者 49 名中 47 名が「5 点 (大変満足)」と、残り 2 名が「4 点 (やや満足)」と回答した。

(3) 2 回目の授業案作成・検討

コアメンバーは 2012 年 6 月 3 日に開催した会議において、授業案を持ち寄り、検討を行った。

2 回目に持ち寄られた授業案の題材は、「新聞、壁新聞、口コミ情報、風評被害、テレビ・インターネット、伝言ダイヤル、メディア全般比較、CM、避難所の張り紙、通信・通話、報道の自主規制、ツイッター」と、表 3 に示した 1 回目の題材と比べて多種多様になった。

(4) 構想した授業実践 (2 回目)

2 回目の授業実践構想に先立って、コアメンバーの代表 4 名で分類について検討した。その結果、メディアとの「つきあい方」の視点から、「従来のメディアの見直し」、「非常時と平常時のメディア対応」、「メディアの特性の再確認」の

表3 授業実践の構想（1回目）

	授業実践名	ねらい
1	新聞のいろいろな欄の役割	・新聞にはいろいろな欄があり、それぞれのいろいろな役割をしていることに気付く。
2	ラジオも使おう	・被災地と被災地でない所では、必要な情報入手する手段が違うことが分かる。 ・様々な情報を得る手段を知っておくことが大切であることが分かる。
3	音声だけではイメージのギャップができる	・音声だけの情報は、自分の体験や知識、イメージで判断していることを知る。 ・音声だけの情報を受け取った時、冷静に判断したり他の情報と比較したりすることが必要なことに気付く。
4	テレビ局はより多くの人が知りたい情報を流す	・テレビ局は緊急時に、予定していた番組や番組内容を変更して、より多くの人が知りたい情報を流すことがあることを理解する。
5	震災を利用したチェーンメール	・情報の出所や内容を確認、むやみに再発信しないことの大切さに気付く。
6	緊急時の個人情報の取り扱い	・緊急時には、個人情報の取り扱いを変える場合があることが分かる。

表4 授業実践の構想（2回目）

	授業実践名	ねらい
7	テレビとインターネット	・テレビとインターネットの特性を意識し、組み合わせる必要性に気付く。 ・災害時は情報伝達の漏れが生命の安全に関わるため、テレビもインターネットも受け手の意思に関わらず災害に関わる多くの情報を送ることを知る。
8	新聞の役割について考えよう	・壁新聞が非常時に、身の回りの人に身の回りの情報を伝えるのにとでも役立つことが分かり、自分たちが壁新聞を作るときに、どんなことに気をつけたらよいかを考えることができる。
9	テレビCMの意図と私たち	・平常時と非常時のテレビCMを読み解くことで、テレビCMの作り手は、作り手の意図をCMに込めているだけでなく、受け手の状況を考えて内容を発信していることが分かる。
10	新聞が伝えていることは何か	・全国紙の記事を分析し、出来事を風化させないための工夫を知る。 ・全国紙や地方紙、地方紙どうしを比較し、他地域の状況を知ったり情報を得たりすることの大切さを考える。
11	報道される情報、報道されない情報	・テレビや新聞が報道する情報は、自主的に制限をしたり、取捨選択されて伝えられたりしていることや時には受け手の状況を考え、発信されていることを知る。
12	非常時におけるツイッターのはたらき	・東北地方太平洋沖地震発生後、被災地のマスメディアはツイッターによって人々の生活を支える情報や被災情報を発信したことを知り、非常時におけるツイッターのはたらきの良さに気付く。
13	緊急時の安否確認	・非常時に連絡がとれるように、携帯電話が、どのようにしてつながるかを知り、使い分けてつながりやすい方法を見つけることができるようにしたり、災害時の連絡システムについて知ったりする。

3分類とすることとした。

授業実践が3分類それぞれへほぼ均等に位置付くように、2回目は7実践を構想し（表4）、1回目と合わせた全13実践を表5のとおり分類した。7～13は2012年10月6日（土）に開催した「第6回メディアとのつきあい方学習実践研究会学習会」にて、模擬授業やポスターセッションとして実施した（図2）。参加者へのアンケート調査で「模擬授業やポスターセッション」に対する満足度を「5点（大変満足）～1点（大変不満）」の選択肢により尋ねたところ、回答者50名中42名が「5点（大変満足）」と、残り8名が「4点（やや満足）」と回答した。

表5 授業実践とその3分類

授業実践		分類		
		従来のメディアの見直し	非常時と平常時のメディア対応	メディアの特性の再確認
※1～6は1回目に検討 ※7～13は2回目に検討				
1	新聞のいろいろな欄の役割			○
2	ラジオも使おう	○		
3	音声だけではイメージのギャップができる			○
4	テレビ局はより多くの人が知りたい情報を流す		○	
5	震災を利用したチェーンメール		○	
6	緊急時の個人情報の取り扱い		○	
7	テレビとインターネット	○		
8	新聞の役割について考えよう	○		
9	テレビCMの意図と私たち		○	
10	新聞が伝えていることは何か			○
11	報道される情報、報道されない情報			○
12	非常時におけるツイッターのはたらき		○	
13	緊急時の安否確認	○		



図2 第6回メディアとのつきあい方学習実践研究会学習会の様子

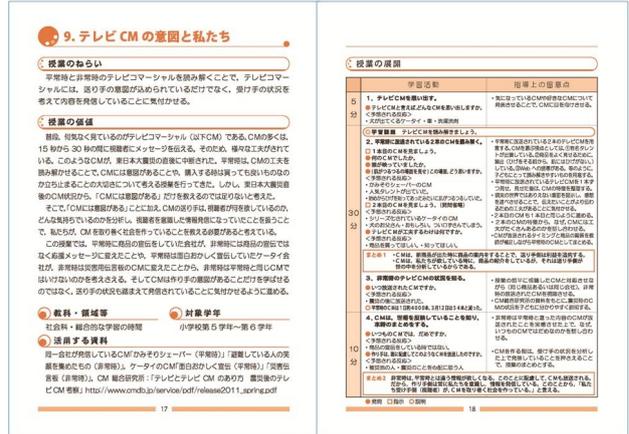


図3 指導事例集の実践事例のページ

6 指導事例集の作成と今後の課題

本研究では、非常時におけるメディア・情報の動きやその可能性、とるべき行動や態度について考えるための「非常時におけるメディア活用に備えた授業実践のための指導事例集」開発に向けて、東日本大震災におけるメディアの動きを題材とし、非常時におけるメディア活用に備えることを目指した内容を整理した。その結果、「従来のメディアの見直し」「非常時と平常時のメディア対応」「メディアの特性の再確認」という3視点で分類した計13の授業実践を構想することができた。

その後、13の授業実践を集録した「非常時におけるメディア活用に備えた授業実践のための指導事例集」を作成した。図3のように見開き2ページで1つの実践を掲載すると共に、図4のような実際に授業実践を行った先生の声に掲載し、実践する際の留意点等を示すことで指導事例集がより活用しやすいものとなるよう工夫した。

今後は、指導事例集を掲載したWebサイト等の広報や活用の啓発に努め、非常時におけるメディア活用に備えた授業実践の普及を図ってきたい。



図4 指導事例集の「実践を行った先生の声」のページ

7 文献

- ・高橋伸明, 吉野和美, 影山知美, 笠原晶子, 松橋尚子, 宮脇康一, 渡辺純恵, 此川美奈代, 天野三鶴, 堀田龍也 (2011)「情報が日常生活や社会に与える影響を考えさせる学習活動」のための授業パッケージの開発, 全日本教育工学会研究協議会第37回大会論文集 CD-ROM
- ・高橋伸明, 吉野和美, 影山知美, 笠原晶子, 松橋尚子, 宮脇康一, 渡辺純恵, 此川美奈代, 天野三鶴, 堀田龍也 (2011)「情報が日常生活や社会に与える影響を考えさせる学習活動」のための授業パッケージを活用した教員研修プログラムの評価, 日本教育工学会研究報告集, JSET11-5, pp. 29-34